

小学校教師による、小5 社会科“森林資源”の教材研究—1 枚の写真を通して

木を伐るのは悪いこと？

作成：鈴木 真（すずき まこと／練馬区立中村西小学校主任教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*

語り：「木を伐っているこの写真を見て、みなさんは、どんなことを感じましたか。『かわいそう』『自然を破壊している』と感じる人もいると思います。樹木も生き物です。できれば伐らないでほしいと思う気持ちは大切なことです。でも、もしも木を伐らないとどうなるのでしょうか。

わが国の森林の約4割は人工林です。人工林は人が主に木材を生産するために、スギやヒノキなどを一斉に植えた森林です。このような森林で間伐をしないと、樹木自体が細いもやしのような弱い森林になってしまい、台風や大雪で大きな被害が発生してしまいます。また、間伐をしないと森林の下の地面に日光が届かないので、下草が発達しません。すると、生き物が少ない森林になってしまいます。また、大雨の時に土が流れやすくなってしまいます。ですから、人工林では間伐をすることで、樹木の本数を調整し、日光が地面に当たるような明るい森林にすることが大切なのです。一度人間が手を加えた森林は、人間が最後まで世話をする必要があるということです。そのために間伐は欠かせないのです。

生長した森林は、やがて伐採されます。伐らなければ、家を建てる建築材や、家具などの木製品、紙などの私たちの生活に欠かせないものが手に入らないのです。また、森林が二酸化炭素を吸収する働きがあることは知っていますね。ぐんぐん生長している若い木はたくさんの二酸化炭素を吸収します。しかし、生長が止まった大木は二酸化炭



◀間伐作業（日林協撮影）

素をあまり吸収しないのです。二酸化炭素の吸収をねらうのなら、大きくなった木は伐って若い木を育てるほうが効果は高いのです。

木を伐るといことは、大変な作業です。木は重く上手に倒さないと危険です。また、伐った木を運び出すのが大変です。多くの手間と費用がかかります。木を伐っても見合った値段で売れなければ、かえって損をしてしまいます。それで、日本中で木を伐らない人工林が増えているのです。これは、環境にとって決してよいことではありません。多くの人工林の世話をする責任が私たち人間にあるのではないのでしょうか。」

意図（鈴木）：小学校第5学年の社会科では、「森林資源の育成や保護に従事している人々の工夫や努力」について学習する。森林が国土の保全に大きな役割を果たしていることは理解できても、「人の手を加えない自然の森林がよい」「木を伐る林業はよくない」といった認識になりがちである。そこで、木を伐ることの意味について考えることを意図して作成した。

寸評（山下）：誌上教材研究その41（本誌 No. 822）に続けて、教育において「誤解されやすい内容」を取り上げてもらった。教育は、生命尊重、自然保護といった観点を強調する。そのため「木を伐る」という行為とその観点が衝突する。そこで、健全な森林を育成するための「伐る」という行為であることをきちんと認識させておくことが重要となる。

*山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）